

日蓮大聖人御書全集

まつのだののごしょうそく

松野殿御消息

いつこう こと

(二劫の事)

新版
1982
〜
1985

まつのどの(ま)しようそく いっ(ハ)う へと

松野殿御消息(二劫の事)

けんじ ねん がつ にち さい

建治2年('76) 2月17日 55歳 松野六郎左衛門

こうじひとこ しゅじゆ もの おく た そうろう

柑子一籠・種々の物、送り給ひ候。

ほけきようだいしち まき やくおうほん い もろもろ ほし なか

法華経第七の巻の薬王品に云わく「衆の星の中に

がつてんし もつと だいいち ほけきよう

月天子は最もこれ第一なり。この法華経もまたかくのごと

せんまんおくしゆ もろもろ きようぼう なか もつと しようみよう

く、千万億種の諸の経法の中において、最もこれ照明

うんぬん もん こころ こくう しゅう はんり

なり」云々。文の意は、虚空の星はあるいは半里、ある

いちり はちり じゅうろくり てん まんげつりん

いは一里、あるいは八里、あるいは十六里なり。天の満月輪

はつびやくり けごんぎようろくじっかん はちじっかん

は八百里にておわします。華嚴経六十卷あるいは八十卷・

はんにやきようろつぴやくかん ほうどうきようろくじつかん ねはんぎようしじつかんさんじゅうろくかん

般若経六百卷・方等経六十卷・涅槃経四十卷三十六卷・

だいになちきよう こんごうちようきよう そしつじきよう かんぎよう あみだきようとう むりよう

大日経・金剛頂経・蘇悉地経・觀経・阿弥陀経等の無量

むへん しょきよう ほし ほけきよう つき と

無辺の諸経は星のごとし、法華経は月のごとしと説かれて

そうろうきようもん りゆうじゆぼさつ むじやくぼさつ てんだいだいし

候経文なり。これは、竜樹菩薩・無著菩薩・天台大師・

ぜんむいさんぞうとう ろんじ にんし ことば きようしゆしやくそん

善無畏三蔵等の論師・人師の言にもあらず、教主釈尊の

きんげん たと てんし いちげん

金言なり。譬えば、天子の一言のごとし。

ほけきようやくおうほん い よ きようてん じゆじ

また法華経藥王品に云わく「能くこの經典を受持するこ

もの いっさいしゆじよう なか

とあらん者もまたかくのごとく、一切衆生の中において、

だいいち とううんぬん もん こころ ほけきよう たも ひと

またこれ第一なり」等云々。文の意は、法華経を持つ人は、

なん

でんぷ

そうら

さんがい

しゅ

男ならば、いかなる田夫にても候え、三界の主たる

だいぼんてんのう

しゃくだいかんいん

しだいてんのう

てんりんじようおうないしかんど

にほん

大梵天王・釈提桓因・四大天王・転輪聖王乃至漢土・日本

こくしゅとう

すぐ

にほんこく

だいじん

の国主等にも勝れたり。いかにいわんや、日本国の大臣・

くぎよう

げんぺい

さむらい

ひやくしようとう

すぐ

もう

およ

公卿・源平の侍・百姓等に勝れたること、申すに及ば

によにん

きようしかによ

きちじようてんによ

かん

りふじん

ようきひ

ず。女人ならば、橋戸迦女・吉祥天女・漢の李夫人・楊貴妃

とう

むりようむへん

いつさい

によにん

すぐ

と

そうろう

等の無量無辺の一切の女人に勝れたりと説かれて候。

あん

きようもん

もう

案ずるに、経文のごとく申さんとすれば、おびただしき

ひと用

難

しん

おも

ようなり。人もちいんこともかたし。これを信ぜじと思え

によらい

きんげん

うたが

とが

きようもんあき

あびじごく

ごう

ば、如来の金言を疑う失は、経文明らかに阿鼻地獄の業と

見えぬ。進退わずらい有り、いかがせん。

ほうもん

きようしゆしやくそん

しじゆうよねん

あいだ

むね

うち

隠

この法門を、教主釈尊は四十余年が間は胸の内にかく

たも

おんとししちじゆうに

もう

させ給う。さりとはとて、御年七十二と申せしに、

なんえんぶだい

ちゆうてんじくおうしやじよう

うしとら

ぎしやくつせん

と

南閻浮提の中天竺王舎城の丑寅、耆闍崛山にして説かせ

たま

いま

にほんこく

ほとけごにゆうめつ

せんしひやくよねん

もう

給いき。今、日本国には仏御入滅一千四百年と申せしに

きた

いま しちひやくよねん

さき

いつせんしひやくよねん

あいだ

来りぬ。それより今、七百余年なり。先の一千四百年が間

にほんこく

ひと

こくおう

だいじんないしばんみん

いちにん

は、日本国の人、国王・大臣乃至万民、一人もこのことを知

らず。

いま

ほけきよう

渡

たま

ねんぶつ

もう

今、この法華経わたらせ給えども、あるいは念仏を申し、

しんごん

暇

い

ぜんしゅう

じさい

もう

あるいは真言にいとまを入れ、禪宗・持斎なんと申し、あ

ほけきよう

よ

ひと

あ

なんみようほうれんげきよう

るいは法華經を読む人は有りしかども、南無妙法蓮華經と

とな

ひと

にほんこく

いちにん

な

にちれん

はじ

けんちようごねんなつ

唱うる人は日本国に一人も無し。日蓮、始めて建長五年夏

はじ

にじゅうよねん

あいだ

いちにん

とうじ

ひと

ねんぶつ

もう

の始めより二十余年が間、ただ一人、当時の人の念仏を申

とな

ひと

わら

けつく

罵

打

すように唱うれば、人ごとにこれを笑い、結句は、のり、う

き

なが

くび

刎

いちにちにち

ひとつき

ち、切り、流し、頸をはねんとせらるること、一日二日、一月

ふたつき

いちねんにねん

堪

覚

そうら

二月、一年二年ならざれば、こらうべしともおぼえ候わね

きよう

もん

みそうら

だんのう

もう

おう

せんざい

ども、この經の文を見候えば、檀王と申せし王は、千歳が

あいだ

あしせんじん

せ

使

み

ところ

たも

ふきようぼさつ

間、阿私仙人に責めつかわれ、身を牀となし給う。不輕菩薩

もう

そう

たねん

あいだ

あつく

めり

とうじよう

がりやく

と申せし僧は、多年が間、悪口・罵詈せられ、刀杖・瓦礫

こうむ

やくおうぼさつ

もう

ぼさつ

せんにひやくねん

あいだみ

焼

を蒙り、薬王菩薩と申せし菩薩は、千二百年が間身をやき、

しちまんにせんさい 臂

や

たも

み

七万二千歳ひじを焼き給う。これを見はんべるに、いかな

せ あ

塞

とど

おも

こころ

る責め有りともし、いかでかさてせき留むべきと思う心に、

いま

たいてんそうら

今まで退転候わず。

ざいけ

おんみ

みなひと

憎

そうろう

しかるに、在家の御身として、皆人にくみ候に、しか

げんざん

い

そうら

おぼ

ごしんよう

もいまだ見参に入り候わぬに、いかにとしめして御信用

かこ

しゆくじき

らいじよう

あるやらん。これひとえに過去の宿植なるべし。来生に

かなら

ほとけ

な

たも

ご

きた

催

心

必ず仏に成らせ給うべき期の来つてもよおすころなる

べし。その上、うえ きようもん経文には、鬼神の身に入る者はこの経を信きじん み い もの きよう しんぜず、しゃかぶつ おんたましい い 替 ひと きよう しん釈迦仏の御魂の入りかわれる人はこの経を信ずとみ そうら みず つき かげ い みず す見えて候えば、水に月の影の入りぬれば水の清むがごとく、みこころ みず きようしゆしやくそん つき かげ い たも 頼御心の水に教主釈尊の月の影の入り給うかとたのもしく
おぼ そうろう覚え候。

ほけきよう だいし ほつしほん い ひとあ ぶつどう もと法華經の第四の法師品に云わく「人有つて仏道を求めて、
いっこう なか がっしょう わ まえ あ むしゆ げ一劫の中において、合掌し我が前に在つて、無数の偈をも
ほ さんぶつ よ ゆえ むりよう くどく えつて讃めば、この讃仏に由るが故に、無量の功德を得ん。
じきようしや たんみ ふく かれ す とううんぬん もん持経者を歎美せば、その福はまた彼に過ぎん」等云々。文の

こころ いっこう あいだきようしゆしやくそん くよう たてまつ まっだい

意は、一劫が間教主釈尊を供養し奉るよりも、末代の

せんち ほけきよう ぎようじや じようげばんにん 怨 がし

浅智なる法華經の行者の上下万人にあだまれて餓死すべ

びくとう くよう くだく すぐ きようもん いっこう

き比丘等を供養せん功德は勝るべしとの經文なり。一劫と

もう はちまんり そちら あお いし 鑢

申すは、八万里なんと候わん青めの石をやすりをもつて

むりようこう あいだ磨 尽 ぼんてんさんしゆ ころも もう

無量劫が間するともつきまじきを、梵天三銖の衣と申し

極 細 美 天 はごろも

てきわめてほそくうつくしきあまの羽衣をもつて、三年に

いちどくだ 撫 尽 いっこう もう

一度下つてなずるに、なでつくしたるを一劫と申す。この

あいだ むりよう たから くよう じよくせ

間、無量の財をもつて供養しまいらせんよりも、濁世の

ほけきよう ぎようじや くよう くだく 勝 もう もん

法華經の行者を供養したらん功德はまさるべきと申す文

なり。

しん

ほけきよう

体

このこと信じがたきことなれども、法華経はこれにい

夥

実

こと

数多

おびただしくまことしからぬ事どもあまたはんべり。また

しん

思

たほうぶつ

しょうみよう

くわ

きようしゆしやくそん

信ぜじとおもえば、多宝仏は証明を加え、教主釈尊は

しょうじき

きんげん

名乗

たも

しょうぶつ

こうちようぜつ

ぼんてん

付

正直の金言となのらせ給う。諸仏は広長舌を梵天につけ

ちち

讓

はは

じよう

添

けんおう

せんじ

くだ

たも

ぬ。父のゆずりに母の状をそえて賢王の宣旨を下し給うが

みつ

いちどう

たれ

うたが

ごとし。三つこれ一同なり。誰かこれを疑わん。されば、

うたが

ひと

むくろんじ

したいつ

わ

すうほっし

した

これを疑いし人、無垢論師は舌五つに破れ、嵩法師は舌

爛

さんがいぜんじ

げんしん

だいじや

とくいち

したやつ

裂

ただれ、三階禅師は現身に大蛇となる。徳一は舌八つにさけ

ほけきよう

ぎようじや

もち

にき。それのみならず、この法華経ならびに行者を用いず

み

損

いえ

失

くに

亡

ひとびと

がつし

して、身をそんじ、家をうしない、国をほろぼす人々、月支・

しんたん

かず

知

だいいち

につてん

あした

ひがし

い

たも

震旦にその数をしらず。第一には、日天、朝に東に出で給

だいこうみよう

はな

てんげん

ひら

なんえんぶだい

みたま

うに、大光明を放ち天眼を開いて南閻浮提を見給うに、

ほけきよう

ぎようじや

こころ

かんき

ぎようじや

憎

くに

法華経の行者あれば心に歓喜し、行者をにくむ国あれば

てんげん

瞋

くに

睨

たま

しじゆうもち

くに

天眼をいからしてその国をにらみ給い、始終用いずして国

ひと 憎

ゆえ

な

戦

起

たこく

くに

の人にくめば、その故と無くいくさおこり、他国よりその国

やぶ

み

そろう

を破るべしと見えて候。

むかし

とくしようどうじ

もう

幼

もの

つち

もちい

しゃかぶつ

昔、徳勝童子と申せしおさなき者は、土の餅を釈迦仏

くよう

たてまつ

あいくだいおう

う

えんぶだい

しゆ

な

に供養し奉つて阿育大王と生まれて、閻浮提の主と成つ

けつく

ほとけ

成

いま

せしゆ

かしとう

ほけきよう

て、結句は仏になる。今の施主の菓子等をもつて法華経を

くよう

じゆうらせつによとう

よろこ

たも

供養します。いかに十羅刹女等も悦び給うらん。こと

っ

そうろう

なんみようほうれんげきよう

なんみようほうれんげきよう

ごとく尽くしがたく候。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経。

にがつじゆうしちにち

にちれん

かおう

二月十七日

日蓮

花押

まつのどのごへんじ

松野殿御返事